

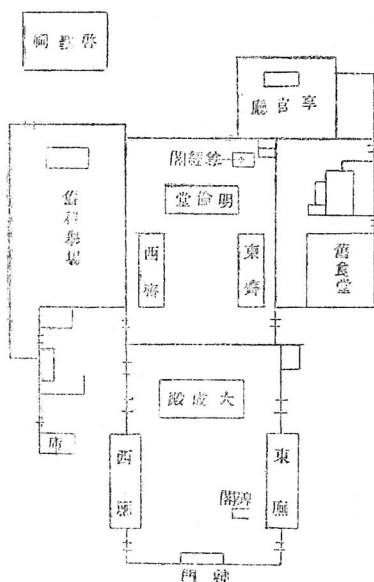
京城の經學院を見る

浦 川 源 吾

大正十五年八月十五日、午前中に大急ぎで自動車走らせ、朝鮮神宮に詣で、總督府を訪れ博物館を見、昌德宮に入り、勤政殿に至り、慶會樓下に佇み、昌慶苑に遊び、更に祕苑を巡つて花月食堂での朝鮮教育會の晝食の招待に參會した。炎天の下をあはたたく見物した後、冷ビールの杯を手にしたのは愉快かつた。故郷遠く離れた此地でたべる日本料理の味も亦變つた甘さであつた。心からのもてなしに、朝鮮の教育に就いて種々に語り聞かして呉れたのも嬉しかつた。何よりも嬉しかつたのは正に十五年の別後、廣島の學窓での舊友、高橋君に邂逅したことであつた。君は今總德府の視學をつとめ、十三道教育の重鎮である。舊雨の感轉た繁きはも

とより、刮目に値する君の努力の迹を祝する心に滿たされた。宴果てて主客將に散じようとする時、君は特に予に、午後の自由の時間を利用して、嘗つては朝鮮儒學の中心であつた經學院を見ては如何、他に出席しなければならぬ會合があるので、自ら案内の役は勤め得ないが、その代りに府屬の德江君を頼んで便宜を計らふからと言つて呉れた。朝鮮の儒學の歴史に就いては全く知識の無い自分に、此が機縁となつて研究の興味も起らば、此度の見學旅行の大なる收穫であると思つて、其の好意を感謝し、德江君を煩はして、團體からはなれて一人行くことにした。勿體ないほど立派な總督府の自動車をも提供された。

經學院は京城の北部、崇教場に在り、大成殿（文廟）と明倫堂とより成つて居る。



吾々は明倫堂のある區劃の東南の門より入つた。中には一種森嚴な空氣が漂つて居て、自らの心の引きしまるのを覺へた。明倫堂に向つて行く砌道の左右には、年古りた槐樹が左右に一本づつ、枝を廣く張つて居る。茂つた葉蔭の石上には、晝睡の夢から醒めた鮮人の悠閑な姿が見えた。淳風を浴びて此の閑寂な庭に物も思はで暮す人を羨まずには居られなかつた。明倫堂は一

段と高いところにある。石段を昇つて堂に入つた。司成の金完鎮氏が出て來て、吾々を歓迎した。同氏は可成日本語に巧みで、それからは案内と説明の勞とは此人が執つ呉れた。は入つたところは經學院の事務室らしく、幾つかの卓子が並べられてあつた。右傍の小室は宿直の室で温突の設備があるそうで、澁紙のリノリウムを張りつめてあつた。事務室の左は明倫堂の正堂である。「明倫堂」の大額をはじめ、銀泥を施した御製大學思杯詩、並に序解の刻字のある額や右文正公朱浚吉の筆になる敬齋箴・風興夜寐箴や、白鹿洞規を刻した額、何れの天子の筆になつたかは今は明でない「正心誠意」、「讀書志在聖賢」の額があつた。また一隅にはこの堂の前庭で、傘を立て、其下に答案を書いて居る進士の誠驗を受ける人々の様子を描いた油繪もあつた。刻まれて居る字は支那人ほどの雅味はないが、日本人のそれよりは遙かに見事なものである。此等の額の文字から推して、半島の儒學が朱子學を主としたものであることがわかる。「明

倫堂」の大字は朱字の文字をあつめて模寫したものである。正堂の西は應接室らしい調度である。これは李朝時代、天子が釋尊の經に臨まれた時、休憩の室だつたとか。然し兎に角簡素なものである。此堂は昔は儒學の講義をなすところで、北東にある尊經閣は圖書を藏し、學生の研究に必要な書籍は大概備へられてあつたそうである。尊經閣の後にある享官廳は教官の食事をしたところ、その西方の啓聖祀は孔子の父叔梁紇を主祠とし、顏同の父無繇、曾參の父點子思の父孔鯉、孟子の父孟激を配享してある。數千載の下、異國の地に其父を享祠せしむるとは身を立て名を成して父祖を榮にした者としては五聖に如くものはあるまい。

明倫堂の左右に南北に連る平家建は東齊、西齊である。これは昔の學生の寄宿舎である。吾吾は東齊を見た。西側の壁には室毎に三尺四方の格子窓、下方には温突の竈の口が二個ついで居る。食事の時間を報じたであらう鼓の懸つて居る門を潜つて内側に入つて、先づ目についた

ものは學生の食堂の跡だつた。食堂は柱も朽ち壁も落ち、屋根が半分以上くづれ落ちて地上に推積して居る。其間に雜草が生ひ出て居るその荒廢の有様は半島に於ける儒教の衰微を物語つては居まいか。

東齊の廊下にながれば一間巾位の板はすりへらされて凹凸となり其處に埃が積つて居ると云ふ荒れ方である。廊下に添ふて十六の部屋がならんで居る。試みに室内をのぞいて見ると、凡そ三疊程の廣さで（二室三人收容）、床にはオンドルのある部屋に特有な油團が敷きつめられて居る。西と東に同じ大きさの窓があつて、他はすべて壁、天井は低く何の飾りもなく何となく薄暗い。眞に殺風景だ。此の部屋で或は半島の學問をせをつて立たう、或は王朝に仕へて高位高官に登らうと志して、孜孜として勉學した青年等の往時の俤が彷彿として感慨の深いものがあつた。

明倫堂を出て大成殿の西側にある一廊に行つた。其處には祭器を入れる太殿庫、東廡庫、西

廡庫、表學堂がある。表學堂は平家建ての朝鮮式の典型とも云ふべき感じのよい建築である。

こゝで祭器を參考の爲めに見せてもらつたが、祭器は床の上と棚の上一ぱいに太燭であるとか豆、莛、俎床であるとか、太羹を盛る簋、和羹を盛る銅であるとか、或は簠、簋であるとか、或は酒を盛る犧尊、鳥尊、山罍であるとか、或は尊の下にしく埚、酒を汲む龍勺、酒を飲むための爵であるとか、或は香盒、大小の燭臺、香爐であるとかいふ器が並べられてあつた。皆極めて質素なもので、文廟の祭に用ふるにふさはしいものである。記録の上からどう云ふ風な物だと云ふ事を想像して居たが、今實際に此等の物を見て大いに得る所があつた。

次に大成殿のある所に行つた。門を入つてつきあたり到大成殿があつて、入つて直ぐの右手に西廡あり、それと反對の側に向ひ合つて東廡がある。東廡の前に文廟の碑銘があり、南に神門があり、廣い庭に僅か二本の檜と二本の銀杏と一本の槐とがあるのみである。然しそこには

非常な静けさと、自づから襟を正さざるを得ない壯嚴さがあつた。

大成殿は朝鮮一流の濃厚な色彩を施した建物で、その中でも朱塗の柱と肉色の壁が特に目を引いた。入口の扉の上には「大成殿」と記した額その後には「聖廟」と書いた額が掲げられ、文字は皆肉太との頗る達筆なものである。内に入るとガランとして居つて、中央の正面に大成至聖文宣王の位版を祭り、その前方の東には配享者として顔子、子思子の位版が一番前にあつて次には閔損、冉雍、端木賜、仲由、牧生がありその後には宋朝六賢の中の周敦頤、張載の位版が並べられてある。その反對の西方には四聖の曾子、孟子の位版を前列に、十哲の冉耕、宰予、冉求、言偃、顓孫師の位版を中の列に、宋朝の六賢の程顥、邵雍、朱熹の位版を後列に並べてある。位版は木製のもので油圓を以て蔽ふた卓子の上に安置されてある。これは曲阜の文廟の巨大な木像に比すれば、何といふ簡單さであらう。

東西の兩廡には孔子の七十弟子の外に儒學に

貢獻した支那の學者及び新羅以來朝鮮半島の文教に著功のあつた人々の位版を從祀してある。

今詳しく其の從祀者の名を擧げて見ると、東廡の從享者は總べてで五十六人、先づ周代のものでは、第一位より第三十三位までは澹臺滅明以下の弟子三十三人、煩を避けて其の姓名は略する。この外には第三十四位に春秋左氏傳及國語の作者と稱せらるる左邱明、第三十五位は春秋穀梁傳を作つた穀梁赤がある。

漢代のものでは、第三十六位に儀禮十七篇を傳へた高堂生、第三十七位は詩經を以て博士となり、詩の傳及序を作つたと信せられて居毛長第三十八位には穀梁春秋、魯詩に造詣深く、且支那の目錄學の基を造つた劉向、第三十九位には周禮の注を造つた外、多くの經書の傳注に功のあつた鄭衆、第四十位には鄭衆と同じく諸經の傳注に功のあつた盧植、第四十一位には春秋左氏傳の注釋に貢獻した服虔がある。

唐代では、唐代古文の宗、また佛老を排斥し儒學を顯揚した韓愈が只一人第四十二位に祀ら

れてあるのみである。宋代では第四十三位に程子の弟子で、道を南宋に傳へた揚時、第四十四位には春秋傳を著した胡安國、第四十五位には張拭、第四十六位には黃幹、第四十七位には眞德秀がある。

朝鮮人の從享者では、第四十八位の新羅朝の薛聰、第四十九位は高麗朝の安珣、第五十位は李朝の金宏弼、これ以下は皆李朝の人である。第五十一位趙光祖、第五十二位李滉、第五十三位李珣、第五十四位金長生、第五十五位金集、第五十六位宋浚吉の順序。

西廡の從享者は、東廡と同じく五十六人である。周代のものは第一位宓不齊より第三十三位までは皆孔子の弟子である。この外には第三十四位の公羊高、これは春秋公羊傳を作つた人である。漢では第三十五位の伏勝、この人は尙書を傳へたと稱せられて居る。第三十六位には禮學に貢獻のあつた戴聖、第三十七位は春秋公羊學を闡明し、武帝に勧めて百家を抑へ儒學を正宗とせしめた董仲舒、第三十八位は孔子十二世

の孫で、尙書の傳を作つたと言はるる孔安國、第三十九位は禮學を善くし周禮の注を作つた杜子春、第四十位は漢代經の大宗で、殆んどあらゆる經書に注釋を加へた鄭玄などがある。晋代の人では春秋穀梁傳の注解を作つた苑霽が第四十一位に祀られて居る。

宋代の學者では第四十二位の司馬光、これは資治通鑑を著した人であるが、直接經學の上に貢獻したとは思はれない。彼を儒學の功勞者と見ることは少くも予には了解し得ぬ。第四十三位は揚時の弟子羅從彦、第四十四位は朱子の師李侗、第四十五位は呂祖謙、この人は春秋大事紀を編し、詩經の研究に貢獻した。第四十六位は朱子の弟子で、朱子の成遂げなかつた書經の注釋を完成した人である。第四十七位は元代の許衡である。

朝鮮人では第四十八位の新羅朝の崔致遠、第四十九位は高麗朝の鄭夢周、第五十位は李朝の鄭汝昌、第五十一位李彥迪、第五十二位金麟厚、第五十三位は成琛、第五十四位は趙憲、第五十

五位は宋時烈、第五十六位は朴世采の諸人である。

朝鮮人の從祀者は全部で二十二人、其中で李朝が十八人である。元來朝鮮人を文廟の兩廡に從祀するようになったのは、高麗朝第八代の顯宗の御代に、新羅朝の學者崔致遠と薛聰とを從祀したことから始まつたのである。予は此等の先聖先賢の位版に敬意を表して足を旋らし、明倫堂の西齊の一部に藏せられてある樂器庫の方に向つた。

此室には樂器の外、舞に用ふる器及裝束の類が數多く陳列されてあつた。入口に近いものから次々と見て行つた。先づ見たのは架につるされた編磬である。其數は控へ漏らしたので今は記憶しない。これは玉石で作られ、一々皆厚さを異にして居る。厚さの差によつて其の音色が違ふ。其時は麻布に大切に蔽はれてあつた。編磬の傍には二個の缶が置かれてある。火鉢のやうな形で外は黒く内は朱に塗られてある。土製のもので、外面の中央より上に簡單な幾何學的な

模様を施してある。次には三十六個の舞の時
用ふる干があつた。其次には三十二個の鐘を架
につるした所謂編鐘があつた。編磬といひ、こ
れといひ、随分高い音の出るものであらうが、
これ等を打ち鳴らす文廟の祭典の盛儀と莊嚴さ
とが推し測られる。次には晋鼓といふ胴の頗る
長い太鼓がある。その横手には文舞に用ふる翟
がある。手に握るところは竹で、米には鳥の形
をした飾りが着いて居る。節鼓と並んで支那の
古代からある鼓、祝がある。鼓は虎の形をした
木製のものの背に刻みがあつて、それを長い竹
のささら様のもので摩して音を出すので、原始
的な匂のするものである。祝は臺の上に載せら
れた四角の木箱の上部の中央に圓孔があり、そ
の中に丸い棒が立てられ、其の棒を動かすこと
によつて音を發するのであるが、これも鼓と同
じく恐らく堯舜時代から既に支那にあつたらし
く、樂器としては幼稚なものである。箱の四面
には風景を描いてある。けば／＼しい色彩のも
のであつた。晋鼓よりも更に胴が長いが圍りの

小さい路鼓、七絃の琴、二十五絃の瑟、鼓を二
つ重ねて廻轉によつて、垂れた紐の端で鼓面を
叩く兆鼓などをも見た。又武舞に用ふる戚、舞
人の用ふる皮弁冠、進賢冠、及などをも見て經
學院の見學を終り歸途に就いた。之に要した時
は約三時間、其間親切に案内と説明の勞を執ら
れた徳江君と金完鎮氏との深甚なる好意に感謝
せざるを得なかつた。

經學院はもと成均館と稱し、李朝の太祖が即
位の三年に、都を漢城に奠めてから、高麗の制
に則つて、都の東北隅崇教坊に建て、學問教育
の源泉とした。即位の六年に起工して七年に竣
成した。即これが大學であつたのである。孔子
を祀る所を文廟といひ、學問を講ずる所を明倫
堂といつた。別に養賢庫とて館儒の供饋を掌る
ところがあつた。これは今の明倫堂の北にある
享官廳の前身であらう。それから三年して第二
代定宗の二年に文廟が祝融氏の災するところと
なつた。それは第三代の太宗の七年に重ねて建
築せられた。

第九代の成宗は儒學を獎勵し、成均館を重修し、其の周圍を石で築き、支那の太學の制度に倣つて東西の泮水を鑿ち、其の境域を擴張し、尊經閣をも建てて、始めて今日の經學院の規模とした。然し不幸にも第十四代宣祖の二十五年の亂の際、館の全部は兵禍に罹つた。亂が戢まつて後に之を重建し、同天子の三十四年に文廟が成り、同三十九年に明倫堂が成り、其他の附屬の建築物は漸次に成つたが、それが現存する經學院である。曲阜の文廟に比すれば、もとより論ずるに足らないものであるが、南京や北京のそれに比すれば、建築の様式美觀は別として結構や規模に於ては遜色のないものである。半島の力の程度を以てし、尙斯の如き施設をなしたことは李朝の天子の儒學に對する熱心のほどを物語るものではあるまいか。

然し、時勢の變遷は如何ともすることが出来ない。嘗つては半島文化の源泉であつたこの經學院も、春秋二度の文廟の祭典と、地方にある十三の檀林と連絡を保つて、儒敎の講明をなす

のと時々雜誌を發行することの外は、新しい半島の人々に思想上の指導をなすことも出来ない。一年の經費は恩賜金二十五萬圓より生るる利息金七千五百圓と、總督府より補助の二千圓合計一萬圓足らずのものである。職員としては太提學一人、副提學二人、祭酒(缺員)、司成二人、直員三人(缺)が置かれ、この外に十三道及京城府より學殖、名望共に兼ね備へる人を一人宛講師に列せしむるそうである。地方の檀林を主とするものは、時に儒學を講ずる傍には書道を教授して居るとか儒學といつても殆ど朱子學の範圍を出でないといふことである。

支那で各地の文廟を見たが、それは單なる漫遊客としてあはただしく見物したに過ぎなかつた。然るに京城の經學院では高橋君の好意と徳江君の東道とによつて、祭器を見、樂器を見、其上比較的多くの時間を費し、金完鎮氏の詳細なる説明を得たために、豫想の外の大なる收穫のあつたことは、今思うても、欣快の至りである。言はゞ奇縁によつて經學院を見出したので

ある。さればこの經學院を知つたのを縁として
更に半島儒學の歴史を見出したものである。

(昭和二・六、六)